

弥生・古墳時代の造形と ひとつのかかわり

総研大・国立歴史民俗博物館 准教授 上野 祥史

三上 どうもありがとうございました。続いての講演は最初に講演された藤原哲さんの主任指導教員をしておりました総研大の上野祥史准教授の「弥生・古墳時代の造形とひとつのかかわり」です。それでは、よろしくお願いいたします。

上野 総研大の考古学の担当をしております上野と申します。よろしくお願いいたします。藤原さんの指導教員とご紹介を受けましたが、藤原さんは当初、著名な古墳時代研究者である広瀬和雄先生に指導を受けておいでになりました。広瀬先生がご退職されたのち、私が研究の後半段階の主任教員として、藤原さんの研究を支援、サポートしてまいりました。

先ほど非常に魅力のあるおもしろい話をたくさんされたかと思いますが、藤原さんは主に弥生時代と古墳時代を対象に戦争や武器の研究を進めてこられました。弥生・古墳という二つの時代を経て、日本列島社会は大きく変わってゆきます。水田農耕を始めて、社会が複雑化していき、やがて巨大なモニュメントである古墳を作るエリートが登場し、倭王・大王という存在が出てきて、古代国家へと続いていきます。いわゆる古代国家形成期に当たるわけですが、その変化のプロセスを戦争や武器から追いかけていという願望をおもちでした。

繰り返してお話ししましたが、戦争や戦いを考古学のエヴィデンスから追いかけるというのは非常に難しいことです。残っているものから考古学は議論できるけれども、残っていないものから議論はできません。その状況のもと、いろいろな資料——文献とか事象を含めて、その時代のさまざまなメディアを使い、戦いの実態を探り、戦いを通じてどのように社会を描き出せるか、ということをお話しておられました。

総研大での研究に対しては、大学院生は一人で研究を推進する立派な研究者ですので、博士論文をまとめていくにあたり、われわれ教員は、その独自性、オリジナリティやクオリティを高めること、その支援や提言が職務になります。私たちが何を考え、どのような思考をもち、藤原さんの研究に対してどう提言し、支援したのか、本日はそのあたりをお話ができればと思っております。私の話は、戦争と直接は関係しないようにみえますが、戦争や武器を直接研究していない私が、どのようなかわりをもったのか、その辺りをお話いたします。

先ほどから話題にでていますように、考古学の研究は遺跡や遺物を対象としています。「もの」

は雄弁ですので、これはいついつのものだ、こういう特徴をもっている、というところにわれわれの眼は向きがちです。ところが、「もの」、エヴィデンスはあくまでも資料、入口であり、その先を見据えてわれわれは研究をしています。何を研究しているのか、それは対象となる時代の人たちがどういうことを考え、どういう行動をしていたのかという行為、あるいは認識を見通しているわけです。

藤原さんの戦争のお話も、藤原さんが武器マニアというわけではなく、「その時代をどう捉えるのか」という目的に対して、戦争、武器、戦いを検討しているのであり、軍事組織を通じて社会を評価する上での手段なのです。

ところが、「こと」を捉えることは、口で言うほど簡単ではありません。武器は戦いの道具であり、武器が存在したことは確かでも、それをどのように使ったのかはよく分かりません。「もの」、エヴィデンスが存在しても、実際に戦争をしていたのか、戦闘をしたかということとはわかりません。先ほどのお話のように、現在、世界各国が軍備を保有していますが、軍備の保有と戦争は同義ではありません。江戸時代に刀がたくさんあっても、戦うことに必ず結びつくわけではありません。「こと」と「もの」をどのように結び付けて考えればよいのか、それを考える必要があるわけです。先ほど、弥生・古墳の社会変遷や古代国家形成を、武器の使用からとらえることに関心があつた、とお話しました。コメ作りが始まり社会が水平方向に広がり、その密度が上がると集団間の争いが起こり、武力の抗争が統制されて、戦争、戦闘がリーダーのもとに統率される。そして、統一戦争を経て国家が形成される。武器や武力と社会の変化に対しては、応にしてこのようなイメー

ジを抱いてしまいます。しかし、果たしてそうなのでしょうか。

実は、先に社会のイメージが存在していて、その社会イメージを後付けするために武器、出土資料といったようなエヴィデンスを捉えていないでしょうか。このあたりを意識して、広瀬先生や私、藤原さんは議論を重ねてきました。弥生を研究していた藤尾先生も含め、いかに「もの」から「こと」にアクセスをしていくのか、常にそれを意識して助言や提言をおこなってきました。今日は私なりの捉え方、考え方を、武器とは少し異なる視点で話してみたいと思います。私が紹介する資料の多くは、歴博の総合展示で陳列しています。今日はたくさんの方がお越しかと思います。折角の機会ですので、お時間があれば、藤原さんのお話し、私の話を思い出しつつ、展示室をご覧下されば嬉しく思います。

まず、社会の変化と道具の変化について、少し考えてみましょう。社会が変われば、「もの」や活動も変わると、当たり前のように受け止めていないでしょうか。少しなぞかけのような、問題提起をしてみたいと思います。先史や古代の各時代に対して、どのようなイメージを抱くか、問うてみたいと思います。

歴博の総合展示の第一室では、先史と古代、旧石器時代から奈良時代までを対象に展示しています。縄文時代はどんな時代だったか。装飾ゆたかな縄文土器を使い、信仰、儀礼の道具として土偶や石棒を使用していました。人々は堅穴の建物に住み、場合によっては三内丸山遺跡のような大型の建物も利用して活動していました。この時期には、集団間の抗争を物語るような武器、

闘争の道具は明確にはみえていません。人々が狩猟採集をおこない、自然環境を利用するなかで、抗争の目立たない平和な、かつ社会階層が未分化の、フラットな時代のイメージをもちます。

弥生時代になると、水田農耕が始まり、生業の形は大きく変わりました。人為的に自然環境を改変し、経済活動をコメ作りにシフトした時代です。やがて、それは余剰、蓄積を生み、あるいは集団が拡大して分村し、空間的な密度は高まってゆきます。その流れのなかで、環濠集落も登場してきます。また、この時代には、金属器の利用も始まりました。社会の様子も、活動の形態も、使用する道具も、明らかに縄文時代とは異なります。

やがて、古墳時代になると、巨大な古墳が各地に造られます。古墳は、労働力を集約して社会資本を集中しないと建造できません。有名なところでは、大山古墳（仁徳陵古墳）の造営に必要な労働力が試算されています。巨大な建造物は、強大な王権、あるいは社会資本を蓄積できる社会体制の存在などを想定させます（図1）。なおかつ、より巨大な古墳を造営した中期には、先ほど藤原さんがお話しした大量の武器と武具を扱うようになります（図1中央）。そうすると、弥生時代とはさらに状況が変わり、社会が複雑化していく。統合を進めていく中で今度は垂直方向に社会の変化が生じた、と理解することになります。武器や闘争、戦争は、社会の変化をとらえる指標として注目することになります。

しかし、大量の武器や武具を埋めることは、戦争や戦闘が恒常的ではなかったことを物語る、と理解する研究者もいます。古墳をたくさん造り鉄製の武器をたくさん古墳の中に埋める、そんな状態が戦時に起こるだろうか。この時代、武威が象徴性をもったことは確かです。しかし、大



図1 総合展示第1室テーマV

各時期の大型古墳と代表的な副葬品を示している。中央には、中期を代表する甲冑がみえる。 上野撮影

量の武器や武具が戦闘の激化と同じではない、と考える研究者は少なくありません。

やがて古代、今日の司会をされているコース長の三上先生が研究されている時代ですが、この時代になると、日本列島社会も東アジアと肩を並べる状況に変わります。東アジアを意識して、中国や朝鮮半島の制度・システムを取り入れ、あるいは都城というハードウェアを導入して、列島社会は大きく変化しました。

日本列島の社会は、その時々で姿を変え、変化してゆきます。この一連の変化は自明のことなのでしょう。古墳時代もあり、この古代もありですが、東アジアとの関係が変化を生み出したことは確かです。しかし、変化が自明であるかという点、おそらく答えは「ノー」です。倭人集団が自分たちの社会、内外の関係性、環境を踏まえながら新しい社会を作っていく、編成をする、その動きの中で生じた「結果」に過ぎません。つまり、変わることに、変化することが自明とはいえないのです。われわれには、社会に対するアプロオリな前提や認識が潜んでおり、それに資料を当てはめて理解することがあります。それを相対化しないと、社会の実態をとらえることは難しい、常々このような



図2 テオティワカン遺跡

手前にみえるのは「太陽のピラミッド」、奥にみえるのは「月のピラミッド」。上野撮影

ことを意識してきました。戦争や軍事組織もこうした視点でとらえれば、おそらく従来とは異なる評価が展開するはずです。藤原さんの研究では、それが見事に結実していると思います。

もう一つ、意外に思うことを紹介してみよう。アジアを離れたアメリカのことですが、メキシコの諸文明では金属器を利用していません。テオティワカン遺跡は、日本の古墳時代と前後する時期にあたり、太陽のピラミッド、月のピラミッドなど巨大な石造の建造物が存在していますが、金属器は利用していません(図2)。建造物の規模、工芸技術や背景にある思想など、文明という複雑化した高度な社会に相応しい状況がみえています

が、金属器は利用していません。金属器を利用しなくても、社会は複雑化したのです。

縄文、弥生、古墳、古代と時代が進むなか、それぞれの状況は異なっていました。社会の状況が異なることと、使用する「もの」や行動が違うことを、当たり前のように受け止めていないでしょうか。石の文明という外の世界と比較することで、規定観念、ある固定的なものの見方が、思考を狭めていることに気づかされます。「もの」や「こと」を理解するうえでは、時代や背景など

が思いもよらぬ影響を与えることもあるのです。

考古学では遺跡や遺物を分析、分類して、整理をおこないます。先ほど藤原さんは鉄製品、武器、薬莖、ピストルなどを取り上げていたと思います。大なり小なり、遺跡や遺物を分類して、そこで人々がどのような行動をしたのか、現象の整理をおこなうわけです。灌漑水田農耕の始まりや、前方後円墳の登場などは、こういう分類研究の上に成り立っています。

この分類研究は、変化の方向あるいは変遷の過程を明らかにしてくれます。いついつの時代、こんなことをしていました、その次の段階になると、こう変わりました、などを教えてくれるわけです。ところが、なぜそれが変わったのか、どういう事情で変化が起こったのか、ということとは、「もの」あるいは「もの」の形だけに注目してもみえてきません。「もの」を「こと」として捉えるには、少し視点を広げて、さまざまな比較をおこなわなければなりません。

弥生から古墳にかけては、さまざまな金属器が登場しました。銅鐸や銅鏡が登場し、社会に普及してゆくなかで、社会も変化しました。その変化は、必然のようにわれわれの目に映りますが、果たしてそうなのでしょうか。なぜ、「もの」がそこに存在したのでしょうか。なぜ、その形をまとったのでしょうか。そこには、社会の性格や特質が表れているはずです。

ここで私は二つの事例を紹介して話を進めたいと思います。一つは銅鐸、もう一つは銅鏡です。まずは、銅鐸についてです。タイトルには、弥生時代の銅鐸と鳥・鹿の表現と書きましたが、銅鐸に関して一般的な認識を簡単に紹介してみしましょう。

文銅鐸があり(図3)、それをより細かく分けていくと、時間の流れに重ねて、銅鐸づくりの変遷を追うことができます。銅鐸づくりは始めから終わりまで同じではなく、ものづくりが進むなかで、系統の統廃合みたいなことが生じていたことが指摘されています。

歴博には、佐原真、春成秀爾という銅鐸研究の大家が二人おられました。その研究活動を通じ



図3 各種の銅鐸 国立歴史民俗博物館蔵

左：外縁鈕式 (A-536) 中左：扁平鈕式 (A-432)
中右：扁平鈕式 (A-251-11) 右：突線鈕式 (A-143)
概ねスケールを揃えて示した。上野作成、原図は国立歴史民俗博物館編『弥生青銅器コレクション』2010を転載。

銅鐸の形態から時間の流れを追うことができます。銅鐸の吊り手の部分(鈕と呼ぶ)は、断面が厚みのある菱形のものから(菱環鈕)、内外に張り出しが付き(外縁付鈕、扁平鈕)、さらにその形が扁平な縦長の形(突線鈕)へと変化します(図3)。

この四つの分類はさらに細かく深化してゆきますが、一方で、ある時期に存在した銅鐸のヴァリエーションについても整理が進みます。銅鐸には、水が流れるようなさまを表現した紋様をもつ流水文銅鐸と、縦横の帯状の紋様をもつ袈裟櫛

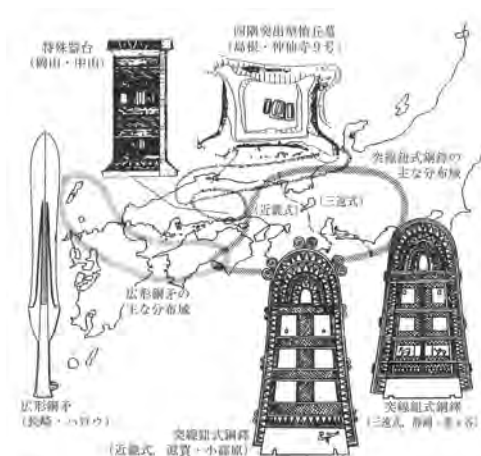


図4 銅鐸の分布と銅矛の分布、墳墓祭祀のひろがり

松木武彦「むら、まち、人口」『弥生時代ってどんな時代だったのか?』2017より転載

て、当館ではたくさん複製品を作成し収蔵しています。その一部は、第一室のテーマⅢ、弥生時代の展示で紹介しています。時期や系譜の異なるさまざま銅鐸をみることができます。

さて、先ほどお話をした各段階の銅鐸、今度はその空間的な広がりを見てみましょう。早い段階の銅鐸は山陰から東海西部、北陸にかけて分布しており、分布の濃淡に大きな違いはみえませんが、この地域の中でいわば共有していたような状況がみえます。ところが、大型化した段階には、明確な形で近畿と東海に偏りがみえるようになります。

「もの」を分類し、変化を追うことができれば、流派、系譜というものが整理される。なおかつ、その分布、人々のかかわりを追いかけていくと、時代の変遷、社会環境、地域関係みたいなものがみえてくるとことになります。

大型化した銅鐸は近畿、東海を中心に広がりをもち、西の九州の武器型青銅器と境を接します。それは、弥生時代社会の変遷、広域の連携、より広い地域の結びつき、やがてそれが次の時代の古墳時代へどう続くのかという前史的な理解にも結び付きます（図4）。当館の総合展示でも、第一室テーマⅣではこ

の時期の状況を展示しています。

銅鐸の大型化は、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への変化として認識されています。古い銅鐸、各地域が銅鐸を共有していた世界では、農耕儀礼の道具として使われていました。音を出す楽器、音響器として利用していたことは、絵画表現からも知ることができます。ところが大型化すると、音響の利用が薄れ、大きさという視覚効果にその意義を集約してゆきます。なおかつ、それが広域に広がり、同じように大型化した銅矛と境を接する状況では、われわれとかれらを識別する装置として機能していた性格もみえてきます。弥生時代の社会が統合・連携を進めるなかで、象徴的意義を担ったと評価される所以でもあります。

こうした銅鐸の変遷を一連でとらえれば、古くから新しくまで連続して形態が変化し、そのときどきで扱いは変わるものの、使うということは続いていた、とみることができます。それを考えるうえで、鍵を握るのが銅鐸に描かれた鳥や鹿の表現です。

銅鐸には数が限られますが、絵画表現をもつものがあります。絵画といっても絵筆で絵を描くのではなくて、鑄造時に鑄型に線を刻み表現した線画です。当館で所蔵する銅鐸にも、吊手の両面に鹿の表現がみえています（図5）。鹿や鳥を表現した銅鐸は、流水文銅鐸にも、袈裟襷文銅鐸にもみえています。

なかには、桜ヶ丘出土の銅鐸や伝香川県出土の銅鐸のように、複数の図像を組み合わせ情景を表現したものもあります（図5）。それは同時代の造形物である土器にも表現されています。土器ですので、乾燥する前の柔らかい状態であれば、棒状のもので線を描くことができます。清

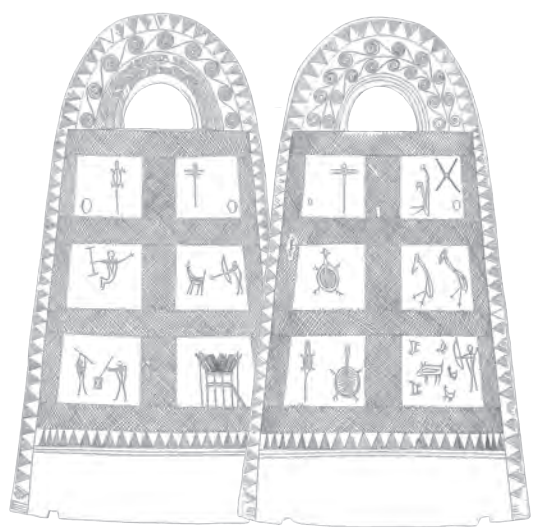


図5 銅鐸にみる絵画表現

上：鈕に表現した鹿の図像 国立歴史民俗博物館蔵（A-536）

下：伝香川県出土銅鐸の図像表現

原品：東京国立博物館所蔵 複製品：国立歴史民俗博物館所蔵

いずれも、国立歴史民俗博物館編『弥生青銅器コレクション』2010より転載、一部改変。

水風遺跡で出土した土器には、建物、大小の人物、背中に矢が刺さる鹿、魚を表現しています。おそらくこれは一連でなんらかの情景表現だろうなということが分かるかと思います。

春成先生の研究で指摘されているように、銅鐸や土器の絵画は、なんらかのストーリー、モチーフ、同時代の人たちの中で共感できるような観念、認識みたいなものが絵画という形で表現されています。後世の神話や伝承などを対照して、鹿は土地の象徴であり、鳥は異界を往来し、穀^{こめ}、稲を育てるための精霊など、スピリチュアルなものを運ぶ伝達者と認識されています。とこ

ろが、この銅鐸の図像は、大きな銅鐸になるとほぼ姿を消します。画像の表現は、小さな「聞く銅鐸」に限られるといえます。

銅鐸は存在しつづけましたが、同時代の人たちの扱い、ものを作るといふ点で見ると、後期には明らかに鹿や鳥などの表現をやめているわけです。絵画表現の消失も、銅鐸への「かわり」の大きな変化の一つでした。

なぜ、表現は消えたのでしょうか。後々の時代にも、鳥や鹿を神聖視していますので、その象徴性が消えたとはみえません。その信仰、思考や観念は、消えてはいないのです。ところが、画像、造形という形で物質化をすることはしなくなったのです。分かっているけれども、形にしない。こうした行為は、古今東西、われわれの日常でも目にすることはあります。「もの」から「こと」を捉えようとすると、明らかにこの段階の変化は大きな意識や行為の変化として捉えられるのではないかと思います。銅鐸をつくり、使うという時間の流れのなかでも、行為と認識に連動する大きな変化が生じたことが見いだせます。

なお、この変化は、土器でもみることができます。弥生時代中期には一定程度存在していた土器の絵画は、後期になると姿を消します。鳥や鹿の図像は、記号や龍の表現へと変化してゆきます。鳥、鹿といった、いわば弥生的なモチーフから、龍など中国的なモチーフへ変わったとすると、そこには信仰とか儀礼に関わる人々の考え方や行動が変わったとみるようになります。その動きは、銅鐸の変化とも連動していたとみえます。観念や行動の変化は「もの」の変化からよみとけるのです。

銅鐸づくりは、中期から後期へと継続しました。継続のなかの変化は、小さな画期のように映りますが、「もの」と人との関わりが大きく転換する画期なのです。銅鐸は大型化して、後期には絵画がほぼ消えました。土器でも鹿と鳥の絵画は消えました。造形や表現の視点でとらえれば、意識と行動が変化する大きな変化が見い出せるはずです。少なくとも中期から後期へと時代が変わるなかで、鳥や鹿の表現は転換を迎えました。銅鐸の利用は続いたが、人の関わりは変化した、かわりの変化は造形の変化としても現れました。それは、分類をもとに「もの」をみるだけでは捉えることができません。つまり、造形の変化を人のかかわりで捉えることにより、当時の人の行為や意識の変化は追いかけていくことができる、というのが提言の一つです。

もう一つは、銅鏡について話してみたいと思います。残り時間が限られるなかで、充分にお話しできるか心もとないところですが、中国製の鏡とそれを模倣して日本列島で製作した倭鏡の話をしてみたいと思います。

先ほどお話しした銅鐸は、朝鮮半島に由来する青銅器であり、朝鮮半島から入ってきて、日本列島で早くに倭製化が起こり、その後は弥生時代の終わりごろまで、銅鐸づくりは継続しました。一方、ここで取り上げる鏡は中国製品です。中国鏡は弥生時代の中期末わりぐらいに日本列島に登場し、その後は古墳時代を通じて流入します。入ってこない時期をちよつと挟むのですが、古墳時代の終わりのころまで、約七〇〇年にわたって中国製品が入り続けます。そして、それに刺激を受けて、日本列島で鏡づくりが展開してゆきました。この動きは、銅鐸とは対照的です。

は、以前に発表したのですが、中国で使っている鏡はほぼほぼ同時期にリアルタイムで日本列島に入ってきています（図6）。時期により多い少ないという違いはありますが、古墳時代はじめに卑弥呼が魏の皇帝に使いを送るころまで、その動きは続きました。

弥生時代には、いろいろな鏡が入ってきます。紋様をみれば、これはいつごろの鏡でどの時期に入ってきたのか、それを使うのは日本列島でどの時期か、ということはおおよそ見当がつきます。鏡の裏側にはさまざまな紋様の表現があり、その紋様は時代とともに変わってゆきました。今でも、私たちが使う鏡には、自分の姿を映す側と反対側、背中のようににはデコレーションが入っ

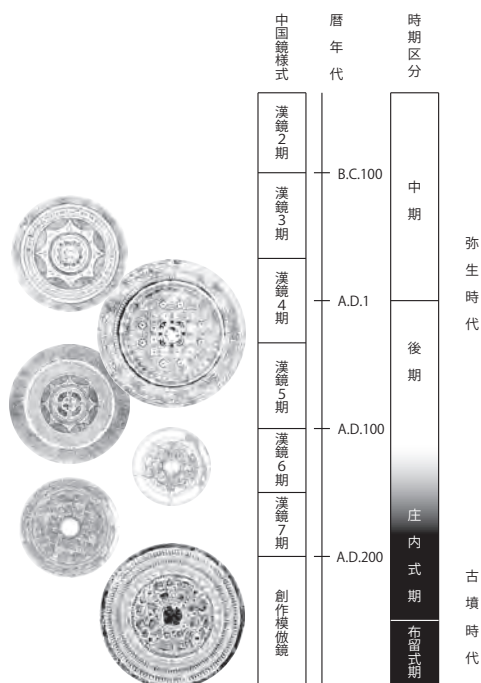


図6 弥生時代から古墳時代にかけての中国鏡

上野祥史「『鏡からみた卑弥呼の支配』『卑弥呼—女王創出の現象学—』大阪府立弥生文化博物館，2015より転載

ここでは、外から入ってきた中国鏡をどう扱うのか、それを模倣してどのように倭製鏡をつくり扱うのか、に注目してみましよう。そこには倭人たちがどのように「もの」に接しようとしたか、あるいはそれを利用した関係性、社会機能がみえてきます。ここで示した図

図7 弥生時代後期の
鏡片・破鏡

上野祥史「鏡からみた
卑弥呼の支配」『卑弥呼
—女王創出の現象学—』
大阪府立弥生文化博物
館，2015 より転載



図8 弥生時代の倭鏡 (S=1/2)

福岡県比恵遺跡出土。福岡市教育委員会『比恵 42 -比恵遺
跡群第 91 次調査報告-』2006 より転載、一部改変。

ていると思います。鏡の紋様を見れば時期が分かる、それは分類研究の素晴らしい成果だと思います。

中国鏡の扱いは、時期とともに少し変化してゆきました。弥生時代の後期には、破片にしたものが多数を占めるようになります。分割する、研磨する、孔を開ける、という加工をしています（図7）。完全な形の鏡もありましたが、この時期はどちらかというと少数派だったわけです。

一方、日本列島でも同じころ、鏡づくりが始まります。ところが、形状には中国鏡との明らかな違いがみえてきます。中国鏡は、小さすぎます。中国鏡がリアルタイムで入ってきましたが、日本列島で作る倭鏡は、大きさが一〇センチメートルを超えることはありません。小型の鏡を作り続けたんですね（図8）。
同時代の中国にはどのようなものがあり、こういうもの

が入ってきた、そして日本列島でこのような使い方をしました、という概況だけ聞けば、「なるほど」と何の疑問もなく得心してしまいます。しかし、よく考えてみてください。大小さまざまな鏡が入ってきたのに、なぜ小型の鏡だけをつくったのでしょうか。あるいは、加工した破片の鏡が数多く存在していたのなら、それを再現してもよさそうです。しかし、いずれも実現はしていません。完全な形の小型の中国鏡に似たものを作るぞという意識が、ものづくりには働いていたということになります。中国製品の扱いと、倭製品の扱いには、このような特徴があったのです。

もう少し、視野をひろげてみましょう。先ほどお話をした銅鐸は、この時期に大型化してゆきます。早くに生産が始まった倭製の青銅器は、大型化するという傾向をもつのですが、倭鏡はかたくなに小型であることを維持し続けたわけです。

そこには、この時代の人々が鏡に何を求めていたのか、その社会的な機能、あるいはどのような形であるべきか、という人々の意識が表れています。それは、一番はじめのころに入ってきた中国鏡、その最も小さな小型な鏡を再現し、社会に供給し続けることに倭鏡づくりの意図があったことを意味しています。はじまりの小型鏡を社会の中に流通させる、消費させることが目的でした。だからこそ、他の青銅器のように大型化することもなければ、破片として流通していた中国鏡のような扱いをすることもなかったのです。それぞれの資料を、個別に扱うのでは、こうした事情はなかなか見えてきません。複数の資料を重ねて、「もの」へのかかわりに注目すれば、ひとの行為やその背後にある意識へと接近することができます。これが、鏡から提言する一つの

話になります。

もう一つは、中国鏡を受入れたことと、中国的な思想を受入れたことについてです。鏡と人のかかわりをどのようにみるか、ということです。ある段階から、日本列島へは中国の神獸鏡が入ってきました。三角縁神獸鏡、名前をお聞きになった方もあると思います。神獸鏡を受け入れて社会が変わる。ちょうど古墳が出現し、エリートが登場し、列島社会の複雑化も大きな局面を迎える頃のことと、神獸鏡の登場と利用には熱い視線が集まります。神獸鏡の利用は、神仙思想など中国の体系的な思想を新たに受け入れて、社会も変化したのだと捉えることは可能です。この時期を前後して、朱の利用も普及してゆきます。中国の歴史書、三国志の魏書東夷伝、いわゆる魏志倭人伝には、卑弥呼が鬼道をよくし、そのことによって新しい社会体制を作った、という記述が残っています。新しい宗教の創出には、中国的な影響があり、それを実証するのが神仙思想と結びつきのある神獸鏡や朱の利用の普及ではないだろうか、と考えてしまいます。

確かに、三角縁神獸鏡は、古墳時代前期を通じて、重要な社会的役割を担いました。三角縁神獸鏡を通じて地域の連携が図られたのですが、列島にない新たなものや思想こそ、新しい社会体制の確立に相応しいように映ります。また、龍の造形や装飾が、弥生時代の終わりに登場しているのです、少しずつ中国的な思想を受け入れたのだとみることも可能です。しかし、当時の人々は中国的な思想を受入れたのでしょうか。

中国では、神仙思想は永遠の生命とかかわりが深いものです。神獸鏡には、西王母など、人間世界にかかわりをもつ人姿の神々が登場しますが、いずれも人間を超越した永続する時間のなか



図9 中国鏡の神獣鏡と倭鏡の龍龍鏡

神獣鏡と龍龍鏡はスケールを揃えて表示
 神獣鏡（左・中）兵庫県西求女塚古墳出土 龍龍鏡（右）滋賀県雪野山古墳出土
 上野作図、原図は神戸市教育委員会編『西求女塚古墳発掘調査報告書』2004、雪野山古墳発掘調査団『雪野山古墳の研究』1996より転載。

に存在しています（図9）。時間を超越した神仙、永遠の生命を手にした神仙、そういった永遠の時間を意識したものの考え方を、はたして当時の日本列島で受入っていたのでしょうか。

古墳時代の日本列島では、神獣鏡などの中国鏡を受け入れるだけではなくて、新たに鏡づくりが始まります。中国鏡を模倣するなかで、倭鏡には再現度の高い部分と、再現度の低い部分、いわゆる省略したり、簡略化する部分が混在しています。滋賀県雪野山古墳から出土した龍龍鏡などは、より早い時期につくられた精良な品質をもつ倭鏡で細かなところ

ろまで丁寧に表示しています。しかし、中国の神獣鏡を模倣した鏡でありながら、外周の紋様は孔雀のような鳥の表現を繰返しており、中央の部分では人姿の神様はみえておらず、中国鏡とは大きな違いがあります（図9）。中国の神獣鏡では、西王母など人姿の神様もいるし、外周にはさまざまな小さな図像をちりばめています。内側には人間に近い神々（神仙）の世界を、外側には月や太陽、天体の運行を擬人化した宇宙を表現していました（図9）。当時の倭人たちは、その詳細を十分に理解しておらず、よく似たものは作るが、省略や簡略化が常態でもありました。あともう一つ、四神—玄武、青龍、朱雀、白虎という四方にあてられる動物姿の神々—も同じです。中国鏡には、この四神を表現した鏡があり、それが日本列島にも入ってきます。倭鏡でも、模倣の対象にしますが、図像は早々に退化してゆきます。

そうすると、ものづくりの視点では、中国的な思想の受け入れ、受け皿がなかったため、省略、簡略化が急速に進んでいった、あるいは製作の当初から根幹の部分は抜けていたということになります。しかし、それは、論理としてやや一貫性を欠いていないでしょうか。神獣鏡の始まりには、中国の影響をやや深いところで受けたとみるのに、それを模倣し展開してゆく際には、ものとして表面的に受け入れたとみるようになります。

また、造形に注目すれば、鏡というメディアを超えて、日本列島では神像を表現しませんでした。古墳時代には、直弧文と呼ぶ幾何学紋様の装飾がありますが、この紋様はさまざまな「もの」を飾ります。ところが、この中国由来の図像や装飾は、鏡以外のメディアに表現することはありません。そして、鏡というメディアでも、退化、省略化が進むことは、中国的な思想の影響をあ

まり大きく見積もれないと思います。新しい神獸鏡や中国鏡の利用が、社会体制を変え新しい時代を迎えたことは確かです。しかし、そこに中国の影響、東アジアの影響をどこまで評価できるのか、については、倭人の主体性を起点に評価をすべきだろうと考えます。

鏡の生産において、中国の影響を受けたことは確かです。それは、弥生のころも古墳のころも同じです。しかし、「もの」というハードウェアを受容しても、「もの」に結び付いたソフトウェア、観念とか思考まで導入したのかというと、必ずしもそうとは限りません。神獸鏡の普及は、東アジアの影響と連動して日本列島社会が変化した評価できる反面、生産や利用など内面にまで深く組み込まれたものかどうかは分からない、そのような理解が「ものをめぐる人の動き」からみえてくるのです。

さいごに、二つほどお話をして終わりたいと思います。金工品（金属工芸）の変化をみると、社会の状況に連動して、その品質も変化したように映ります。古墳時代を通して、金工品は変化し、その技術や精度は変化、向上してゆきます。しかし、「もの」はその時代のなかで必要とされるからこそ生み出され、使われ、選択をされているのです。その部分は、応にしてお見落しがちです。「もの」とひとつのかかわり、という視点で「もの」をとらえると、これまでとは違った史観の復元ができるのではないかと思います。「もの」だけみていても、「こと」はみえてきません。造形を自明、当たり前と捉えるのではなく、どのように生み出されたのか、なぜ存在したのか、に注目する必要があります。

運ぶのでは、同じ儀礼でも演出効果は異なるはずです。さまざまな体感を交えて、銅鐸に接したはずで、それを意識しながら同時代の社会は見ていく必要があるだろうと考えています(図10)。

今回の公開講演会は、藤原さんの戦争という研究を軸にしながら構成しました。ポスターでは、二つの資料を並べています(図11)。一つが古墳時代の鉄製の甲冑、もう一つは中世の具足になります。武器であることは同じですが、「もの」研究や分類研究では時代ごとに研究が進むため、両者が接点をもつことは多くはありません。しかし、武装、武威、莊嚴の道具という「もの」と

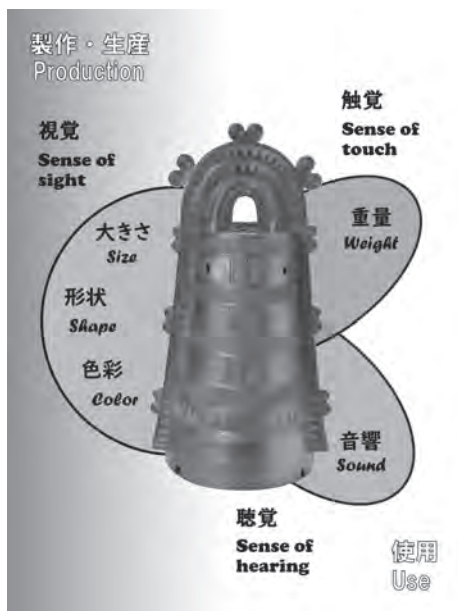


図10 銅鐸をめぐる人の動き 上野作図

また、われわれは見るといふ視点に偏り「もの」を評価しています。銅鐸を例とすれば、当時の人たちのかわりは、見ることにだけに限りません。音を聞く、音響器として聴覚のかかわりも持っていたでしょう。大きな銅鐸と小さな銅鐸では重さも異なるので、触覚も違っていたはずです。巫女さんが懐から小さい銅鐸を出してチリンと鳴らすのと、一〇キログラムを超えるような大きな銅鐸を、大の大人が複数でえつこらと

うに捉えていくのか、という視点があります。一步、二歩下がりがながら、同時代の人々の行動の原理みたいなものをどう見通していくか。意識を共有しつつ、ともに研究を推進してきたということになります。私のお話はこれで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。
(拍手)



図11 2024年度大学院説明会・講演会ポスター

人のかかわりでとらえれば、武装を通じた権威の莊嚴、その社会機能に注目するのであれば、この二つは充分比較、検討の対象になり得ます。藤原さんは、それを弥生、古墳、古代と三つの時代を通じて実践されました。その背景には、私

が今日お話ししたような「もの」から「こと」へ、

あるいは「こと」をどのよ